

中東は今、盟主の座を死守したい
サウジに対し、影響力拡大をもくろ
むトルコとカタールの2陣営による
覇権争いが先鋭化している。また、
こうした中東情勢の不安定化の背景
には、同地域における米国の影響力
の低下もある。

「3極」のせめぎ合い

現在の中東の勢力は、①サウジ、
②トルコとカタール、③イラン—
という三つのグループに大きく分け
られる。サウジは、スンニ派ワッハ
ーブ主義を採用して国内の部族をま
とめ統治の正当性を築いた。トルコ
とカタールはスンニ派のイスラム主
義組織「ムスリム同胞団」を支援し
て域内での影響力を高めようと画策
している。そして、イランはシーア
派の「十二イマーム派」を国教とし
て各地域のシーア派を支援し覇権の

「中東の覇権」の現代史

「ムスリム同胞団」が情勢左右 混沌の中で生じたカシヨギ事件

「中東の盟主」の座を巡るサウジ対トルコ・カタール
の争いが激しさを増している。

拡大を目指している。

これら域内大国は、宗派

や教義を用いて、統治の正
当性や覇権の確立を図って
いる。このうちトルコとカ
タールの両国は、カシヨギ
事件に乗じてサウジ包囲網
を強化している。

かつて中東で勢力を誇っ
たオスマン帝国の後裔であ
るトルコには、盟主の座を
サウジから取り戻したいと
いう野望がある。

一方、豊富な天然資源に
恵まれたものの世界的知名
度が低いカタールは、まず
は中東での存在感を高めた
いという野心を抱えてい
る。サウジと国交断絶状態
にあり、カシヨギ事件でも
衛星テレビ局アルジャジー
ラでサウジ批判を繰り返し
ているカタールは、ムスリ
ム同胞団への支援でトルコ

と一致しており、両国は関係を深め
つつある。

このムスリム同胞団が、中東にお
けるサウジとトルコ・カタールの対
立関係を読み解く鍵である。

ムスリム同胞団を知るには、中東
の歴史をひもとく必要がある。本来、
中東は16世紀からオスマン帝国がイ
スラム教の盟主として勢力を誇って
いたが、第一次世界大戦に大敗する
と、その大部分は欧州列強によって
現在の姿に解体され、トルコが世俗
国家としてオスマン帝国に取って代
わった。

オスマン帝国の崩壊はイスラム世
界に大きな喪失感を与えた。そこで、
イスラム共同体の指導者カリフを復
活させ、世俗法ではなくイスラム法
によって統治されるイスラム共同体
の再興を目的として、1928年に
エジプトで誕生したのがムスリム同
胞団である。その後、ムスリム同胞
団は、しばしば弾圧されてきたが、
現在までアラブ諸国を中心に広がり

を見せている。

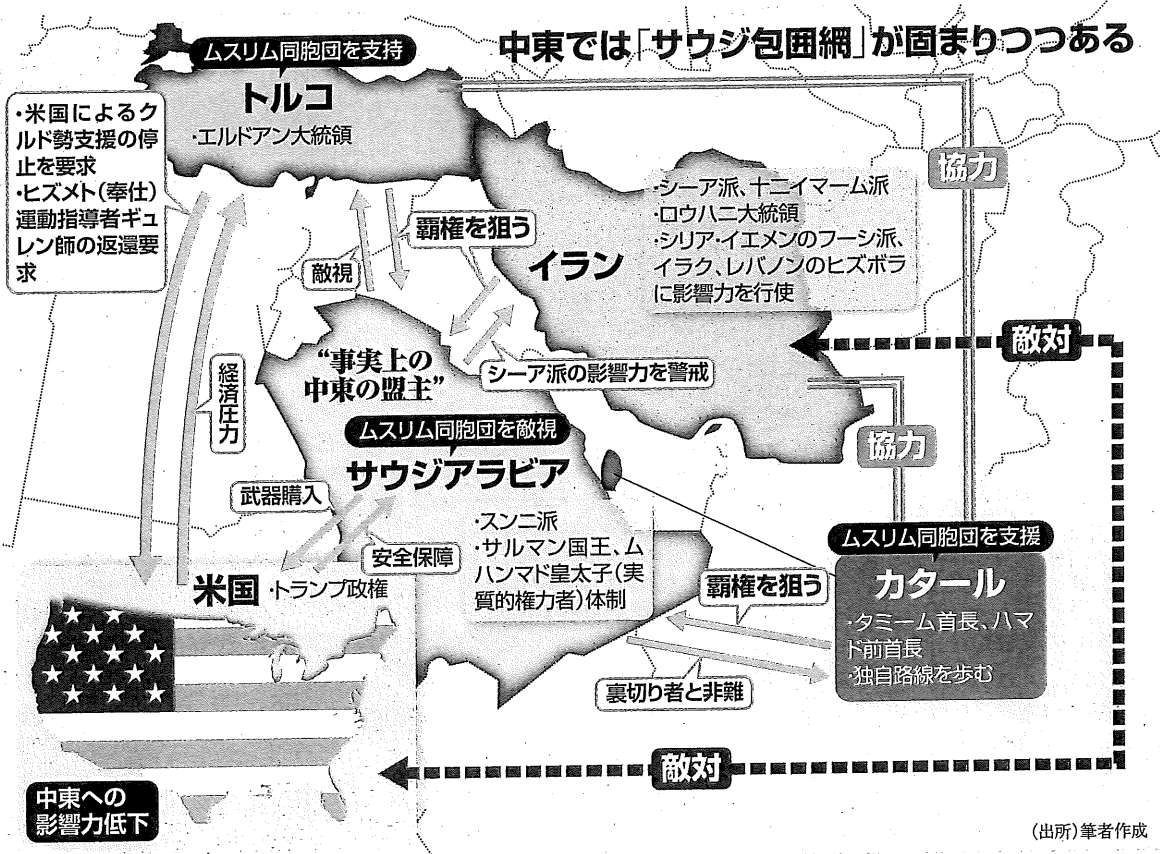
トルコでは、2003年に先進的
民主国家を目指す公約を掲げて首相
に就任したエルドアン氏（現大統領）
が、世俗主義からイスラム主義を強
めた政権運営を行い、ムスリム同胞
団を支持した。

また、カタールは、かつては湾岸
協力会議（GCC）のメンバーとし
てGCC諸国と良好な関係を築いて
きたが、ハマド前首長が天然資源に
依存した経済体制から脱却して投資
や観光業などに力を入れ、自国の存
在感を強調する独自路線を歩むよう
になったことをきっかけに、GCC
諸国との関係を悪化させた。

例えば、中東和平問題に揺れてい
た96年に、カタールはイスラム諸国
の一角でありながら、イスラムの敵
国イスラエルの通商代表部を設置し
た。その後、アルジャジーラを設立
し、11年の中東の民主化運動「アラ
ブの春」の際は、各国のデモを盛ん
に報道。結果的にデモの拡大を誘発

のむら あきふみ
野村 明史

（拓殖大学海外事情研究所助手）



し、ムスリム同胞団を支援した。一方、ムスリム同胞団を敵視するのは、サウジをはじめとするアラブ諸国だ。これらの国々は、アラブの春によってエジプトでムバラク政権が倒れ、民主的な形でムスリム同胞団系のモルシ政権が誕生すると、革命の拡大を恐れてムスリム同胞団と

(出所)筆者作成

敵対。14年にはサウジがムスリム同胞団をテロ組織に指定した。さらに、サウジを中心とする一部のアラブ諸国は17年、カタールと国交を断絶。さらにアルジャジラの閉鎖などをカタールに要求し、両者の亀裂は決定的となった。かつてのサウジは、このような問題に対しては穏便に対処する国であった。ところが近年、ムスリム同胞団がトルコ、カタールの支援を受けて中東で台頭し、また、イランがイエメンのフーシ派を支援してシーア派によるサウジ包囲網を強めているのを受け、サルマン現国王就任後、強硬政策へ方針転換した。サウジが強硬路線に転換したことで、トルコとカタール、イランという3者の対立は一層激しさを増した。今回のカシヨギ事件の背後には、こうした中東の主導権をめぐるせめぎ合いがあるのである。

「力の空洞」で不安定化

中東の歴史は、米国の「気まぐれ」とも言える政策に振り回されてきたと言っても過言ではない。アフガニスタン戦争やイラク戦争で疲弊した米国は、オバマ政権になると中東への積極的な関与を控え「内向き政策」に転換した。米国の中東への関与低下は「力の空洞」を生じさせ、中東をさらに不安定化させた。米国の同盟国のサウジの影響もそれに比例して弱まり、シリア内戦を機にロシアの中東進出を促し、イランを中心とするシーア派やトルコが影響力を高めた。米国の中東に対する関与低下は、従来の同盟国からの不信任感を買ひ、サウジやエジプトなどはロシアに接近する動きも見せて情勢はより複雑化している。また、米国はシエール革命によって中東へのエネルギー依存が低下し、ますます中東離れを起している。トランプ大統領も中東に関してはエルサレム問題などで、支持層への配慮や武器輸出など利益になることとしか興味がないようである。米国の影響力低下に伴って、同盟国のサウジが焦りを深めていたなかで、米国でトランプ政権が誕生した。サウジは武器売買などを通じて再び米国との関係を深め、域内で影響力を振るおうとしていた。その矢先カシヨギ事件の発覚で出鼻をくじかれた格好だ。一方のトルコは、それを機に巧みな外交手腕で米国との関係を改善し、存在感を高めている。スンニ派やシーア派、ムスリム同胞団との対立など不安定要因を抱える中東で、1国のみと関係を深化していくことは非常にリスクがあると